

# 保育者養成校における幼児造形教育の視聴覚教材の開発と指導方法

The Development of Audiovisual Teaching Materials for Childcare Worker Training Courses that Specialize in “ Infant Modeling” of Art Education

林 韓 煥

Hanseop Yim

## ( 要 約 )

本研究の目的は、幼児造形教育の独自性と本質に基づいた授業展開に着目し、幼児造形教育に相応しい教材や制作方法を工夫し、わかりやすい指導方法およびその効果について明らかにすることである。限られた時間（90分）内に学生が十分に理解でき、自主自発的な実技ができるように指導するため、授業展開を工夫し、視聴覚教材を制作した。また、T短期大学の造形授業の履修学生を調査対象とし、幼児教育における造形教育の教材と指導方法についてのアンケートを実施し、授業効果や改善課題を明らかにし、その結果を踏まえ、今後の造形教育にどのように適用できるのか、検討を行った。

## (キーワード)

幼児造形、視聴覚教材、指導方法

## 1. はじめに

幼児造形教育は、幼児教育の中核の一つであり、保育者は子どもが造形活動を行うことで、知能と情緒が育まれ、その子独自の表現の仕方を獲得できるように指導する必要がある。そのため、保育者養成校における幼児造形教育においては、子どもの造形活動は、日常生活の中で自主自発的に行われるものであることを理解し、子どもの自由な造形活動を援助することができる実践力を身につけることをねらいとし、子どもの造形表現に関する専門的な知識と技能を修得させることは不可欠である（高橋 2001）。また、学生の思考力や想像力を高め、自ら表現の方法を探求できるように指導することが重要であると考えられる。このような視点から保育現場で求められる保育者と、保育者養成校が行うべき幼児造形教育の関係を図1に示す。

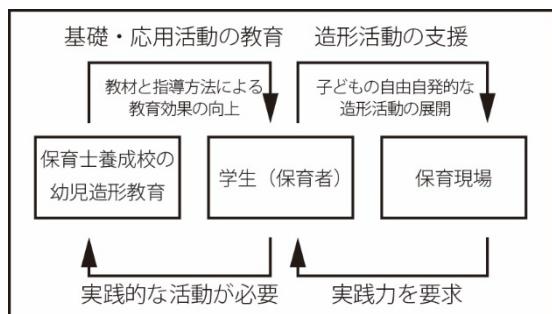


図1 幼児造形教育と学生と保育現場の関係

つまり、保育現場が求める保育者を養成するためには、保育者養成校の幼児造形教育では、造形の基礎技能を身につけることをはじめ、高い応用力を育むよう体験的、かつ総合的な学習ができる授業づくりをすることと、そのために、幼児造形教育に相応しい視聴覚教材や指導方法を工夫し、それを学生にわかりやすく組み立て、自ら造形活動に取り組むように指導することが求められる。

しかしながら、保育者養成校の多くは、学生にこれらの視点に基づいた造形指導が十分に行われてい

ないことが指摘されている。一方で、保育者養成校における幼児造形教育において、学生が幼児造形への理解および制作技法を十分に吸収でき、それに基づいた自由自発的な実技を行い、それに対して常に学生とフィードバックをしながら指導を行うためには、どのような教材をどのように活用し、どのように指導するのか、授業で活動する教材とその指導方法に着目する必要がある。

特に幼児造形教育は、限られた時間内（90分）で行われる演習の授業であり、様々な基礎技能や制作過程等をわかりやすく効率よく伝授するためには、適切な視聴覚教材を活用する方法がある。辻（2008）は、視聴覚メディア教材を授業に適用することについて3つの効果があると述べている。一つ目は、学習者の印象に残る学習資料を提示できることである。受講生は、教師が板書する文字・図と口頭で説明するなどの内容から動画や写真をみながら説明を受けることができる。また、イメージは印象に残りやすく、造形制作などの複雑な構造を理解することには適した方法の一つであると考えられる。つまり、視聴覚教材を授業に導入することによって、受講生の記憶に残りやすく、かつ受講生は授業後にも講義や活動内容を思い出し、活用することが可能になると考えられる。二つ目は、講義だけでは伝えにくい、現実的な場面を提示できることである。保育者養成校における幼児造形教育では、受講生が造形活動の全般的な流れを把握すること、複雑な構造に対する理解、特定の造形活動を行うことによってどのような効果が得られるかを予測する必要がある。そして一人ひとり個性を生み出すためには、多くのものごとに触れ合える体験が必要であり、視聴覚教材によって間接的な体験をすることができると考えられる。これらの学びを通して豊かな想像力が育まれ、実際の保育現場での子どもの造形遊び指導にもつながると期待できる。また、視聴覚教材の中には、造形物の制作プロセスや活用方法、現場の様子などを反映することができる。それが地域性、大学の教育環境を念頭において制作した視聴覚教材であると更なる効果があると考えられる。三つ目は、対面授業との相乗効果が期待できることである。受講生が幼児造形科目に関する基礎知識がなくても視聴覚教材を活用することによって短時間で必要な知識や基礎技能を修得することができる。これらに関して、辻（2008）は、必要最低限な知識を獲得させる治療的な教育活動であると言及している。また、視聴覚教材を用いることによって短時間での造形活動の紹介および説明が可能となり、受講生が実際に体験活動を行う際に受講生とのコミュニケーションを取る時間も確保することが可能になり、限られた授業時間を有効に活用することができ、学習効果が高くなることを期待できる。以上のこのように、視聴覚教材のメリットは、保育者養成校における幼児造形教育においても、効果的であり、その活用意義が非常に高いと考えられる。

しかしながら、造形教育においては、メディアを用いた制作映像や実演での授業方式を採択することは少なく、また、活用される事例においても既製品として作られたDVDやビデオを導入し、造形遊びの現場活動を紹介する程度でとどまっているのが現状である。専門家によって制作された既製品の視聴覚教材を導入することは、手軽に優れた教材を確保できるというメリットもあるが、限られたものから教材を選定しなければならないことや、受講生のレベルや興味・関心に合わせにくいなど、デメリットもあり、受講生の学習意欲を高めるためには、保育者養成校の事情に合わせた自作教材を積極的に開発する必要があると考えられる。神谷（1992）は、児童教育における視聴覚教材を自作して活用することの良い点として、①子どもの実態、地域の実情に即した教材を作ることができること、②教育課程に密

着した教材を作ることができること、③①と②に沿って、教師が創意工夫をしながら作るので、市販の教材とは違ったあたたかみを出すことができ、子どもの心をゆさぶることができることを取り上げた。

また、もう一つの利点は、自作した視聴覚教材は、授業への運用やデータ管理が容易なことである。

特に制作映像は、必要な部分だけを編集して使用することが可能である。そして、制作映像を修正や改善しながら、そのデータを何度も活用することができ、保存するなどの管理にも効率が高い。これらの良さを最大限活かして保育者養成校における幼児造形教育に適した視聴覚教材を開発し、それを適用する試みは、教育効果を高める良い方法であると考えられる。

そこで、本研究では、幼児造形教育に相応しい視聴覚教材に着目し、その教材の開発と指導方法を工夫し、その効果について明らかにすることと、その結果を踏まえ、より良い授業づくりのための改善課題を検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究の研究方法は、第1に、視聴覚教材の開発し、その教材を用いた指導方法を工夫し、実際の授業での適用を試みることと、第2に、視聴覚教材の効果を探索的に検証するために、幼児造形授業の受講生を対象とするアンケート調査を行うことであり、詳細は以下のようである。

### (1) 視聴覚教材の開発および指導方法

限られた時間（90分）内に造形表現への理解、道具・材料、活動方法および基礎技法の伝達、実技の実施までのすべてを効率よく行い、なおかつ学生が十分に理解でき、自主自発的な実技ができるように指導するため、あらかじめ各単元の内容に合わせた授業展開を工夫し、視聴覚教材を製作して授業での適用を試みた。

### (2) 視聴覚教材の効果や改善課題を明らかにするためのアンケート調査

調査対象は、T短期大学の子ども学科の視聴覚教材の活用を試みた造形授業を受講した学生270名であり、倫理的な配慮として、調査の趣旨を説明した上で、同意が得られた人のみを対象とした。調査期間は、2014年7月22日～8月7日であり、調査方法は、無記名の自由記述式調査であった。有効回収率は、93.3%（252票）であった。

また、調査内容は、授業方法、視聴覚教材の効果および改善点、授業に対する満足であり、分析方法としては、単純集計および記述統計量を算出し、 $\chi^2$ 検定を行った。分析には、SPSS16.0 for windowsを用いた。なお、回答者の基本属性を表1に示す。

表1 回答者の基本属性

		度数	割合 (%)
学年	1年生	130	51.6%
	2年生	122	48.4%
性別	男子	18	7.2%
	女子	231	92.8%

表2 視聴覚教材制作における適用範囲と期待効果

視聴覚教材	視聴覚教材の適用範囲	期待効果
制作映像	・造形活動の時間が比較的に長いもの ・基礎と応用活動を同時に学習するもの ・全体プロセスがわかるもの	・理解度の向上 ・活動の把握能力 ・応用能力の向上
実演	・造形活動の時間が比較的に短いもの ・基礎または応用活動を学習するもの ・一部のプロセスがわかるもの	・複雑な構造を理解 ・応用能力の向上 ・発想力の向上
PPT	・理論的な説明から進める活動のもの ・その他の自由活動のもの	・発想力の向上 ・活動の把握能力 ・発想力の向上

テキスト資料（教科書も含む）

### 3. 結果

#### （1）視聴覚教材の開発および指導方法

本研究で行った視聴覚教材の開発は、T 短期大学の造形演習室の設備環境に配慮して制作したものである。また、受講生がわかりやすく造形活動に取り組めるよう検討した。視聴覚教材の種類は新たに作成したテキスト（教科書も含む）をベースに（図2）、制作映像、実演、PPT の3種類に分けて構成した。制作映像は、造形活動のプロセスをビデオカメラで撮影し、5~10 分程度に編集し、大型スクリーンに投影するものである（図3）。また、実演は、授業で道具の使い方や造形技法、造形活動の一部プロセスを、ビデオカメラを通して大型スクリーンに投影し、説明するものである。PPT は、造形活動のねらいや理論的背景を説明し、造形活動の事例などを写真スライドで紹介する際に活用するものである。

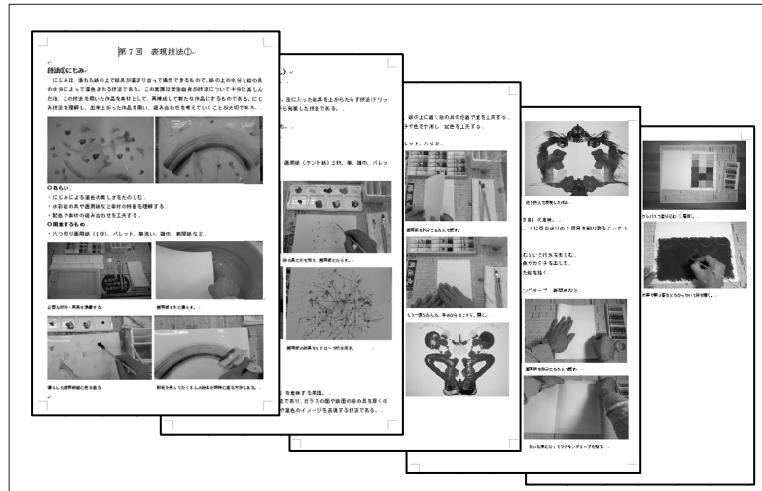


図2 テキストの作成例



図3 自作した制作映像のイメージ

この3つの視聴覚教材の適用と指導方法として、まず、それぞれ教材の特性を考慮した上で適用範囲と期待効果を整理し（表2）、この表に基づいて、単一適用ではなく、組み合わせることによって15タ

イプの複合指導タイプを構成した。その複合指導タイプは各単元の授業に適用させ、その学習効果を試みた。

この複合指導タイプを適用した理由は、多様な観点での学習効果を持たせるためである。

複合指導タイプの例として、ABCD 指導タイプは、制作映像・実演・PPT の構成となり、PPT でのねらいや活動の意義について説明し、制作映像で造形活動のプロセスおよび方法について説明し、実演で複雑な構造を説明することによって造形活動の基礎知識がない受講生も戸惑いなく、活動を取り組むことができる。これらの複合指導タイプを図 4 に示す。

この複合指導タイプは、教員が授業内容に合わせて

適した教材と指導タイプを判断し、組み合わせることが前提になっており、幼児造形教育以外にも通用できるものとなっている。視聴覚教材の適用および指導方法について表 3 と 4 に示す。表 3 と 4 は、1 年生と 2 年生の造形授業の各単元のねらいや内容、主な技法、道具・材料などに合わせて授業に適用する視聴覚教材の複合指導タイプを反映し、展開方法を工夫して作成・適用したものである。また、複数の教材の活用や指導方法は、造形の基礎知識がほとんどない受講生でも造形活動に興味を持ち、自ら造形活動に取り組むこと、保育現場での応用力を高めることを念頭において適用した。

表 3 視聴覚教材の適用と指導方法（1年単元）

1年単元の課題	視聴覚教材のタイプ	指導方法の工夫
似顔絵	AC タイプ +描画キット	活動説明（PPT）→鏡を用いて描く→活動方法の説明（映像）→活動（描画キット）→まとめ
切り絵	ACD タイプ	活動説明（PPT）→活動方法の説明（映像）→活動（テキスト）→まとめ
紙版画	貼り絵：AC タイプ 紙版画：BD タイプ	貼り絵：活動説明（PPT）→活動方法の説明（映像）→活動①→貼り絵の版画：活動方法の説明（実演）→活動②（テキスト）→まとめ
平面から立体	ACD タイプ	活動説明（PPT）→活動方法の説明（映像）→画用紙と絵具のみで活動（テキスト）→まとめ
紙粘土 A	基礎造形：ACD タイプ 動く仕組み：AB タイプ	基礎造形：活動説明（PPT）→活動方法の説明（映像）→活動①（テキスト）→粘土の乾燥→動く仕組み：活動方法の説明（映像・実演）→活動②（彩色）→完成→遊びを体験→まとめ
モビール	AD タイプ	活動説明（テキスト）→切り絵導入の説明→活動①→映像での説明→活動②→まとめ
壁面制作	CD タイプ	活動説明（PPT）→グループ決定→制作方法の説明（テキスト）→アイデアスケッチ→試作→検討→グループ活動の開始→片づけ→壁面に装飾→まとめ

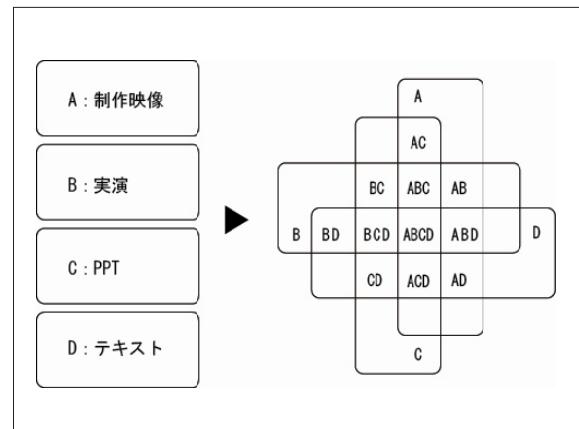


図 4 視聴覚教材の複合指導タイプ

表4 視聴覚教材の適用と指導方法（2年単元）

2年単元の課題	視聴覚教材のタイプ	指導方法の工夫
ドリッピング	ACD タイプ	理論（PPT）→活動方法の説明（映像）→練習→活動→まとめ（教科書）
ステンドグラス	ACD タイプ	理論（PPT）→活動方法の説明（映像）→活動（テキスト）→まとめ
立体カード	ACD タイプ	活動説明（PPT）→活動方法の説明（映像）→事例紹介（PPT）→活動（テキスト）→まとめ
変える絵	C タイプ	活動説明（PPT）→活動方法説明（PPT）→画用紙と絵具のみで活動→まとめ
マーブリング	①：AC タイプ ②：BD タイプ	理論（テキスト）→活動方法の説明（①映像・②実演）→練習→活動（教科書）→乾燥→まとめ
スタンピング	AD タイプ	理論（テキスト①）→活動方法の説明（映像）→活動（テキスト②）→まとめ
紙粘土2	基礎造形：AD タイプ 動く人形：B タイプ	基礎造形：活動説明（テキスト）→活動方法の説明（映像）→活動①（テキスト）→粘土の乾燥→動く人形：活動方法の説明（実演）→活動②（彩色）→完成→遊びの体験→まとめ
お弁当作り	AD タイプ	活動説明（テキスト）→事例紹介（テキスト）→活動方法の説明（映像）→アイデアスケッチ→活動→展示及びまとめ
手作り紙	AD タイプ	活動説明（テキスト）→活動方法の説明（映像）→活動→紙の乾燥→描画活動→まとめ

## (2) 視聴覚教材の効果や改善課題

アンケート調査から得られた主な結果をまとめると、まず、指導方法でよかつたことと工夫すべきこと（複数回答）を表5に示す。指導方法でよかつたことは、「制作映像や実演等」が162名（64.3%）で最も多く、次に「学生とのコミュニケーション」が117名（46.2%）であった。一方、指導方法で工夫すべきことは、「話し方・声の大きさ」が153名（60.7%）で最も多かった。次に、最もわかりやすい教材は、「すべてがわかりやすい」が109名（43.3%）で最も多く、次に制作映像が66名（26.2%）であった（表5）。次に視聴覚教材の理解度および効果を表6に示す。視聴覚教材を用いた授業の理解度の平均値は、「実演」が5点満点中4.16で最も高く、次に「制作映像」が4.03、「PPT」が3.84であった。また、教材の効果として、それぞれの視聴覚教材を通して自分の作品づくりがよくできたという回答が多かった（それぞれ4.04、4.02、3.84）。なお、「視聴覚教材を用いた授業により、幼児造形への興味・関心が高まった」が4.17、「授業の満足度」が4.38であった。

最後に、自由記述では、集中できる授業の雰囲気づくり（マイクの音量、PPTの文字の数や大きさ、制作映像・実演の長さなど）、制作映像や実演の内容・方法への工夫など、改善課題について多数の意見があった。

表5 指導方法で良かつたこと、工夫すべきこと（複数回答）

(n=252)

項目	指導方法で良かつたこと		指導方法で工夫すべきこと	
	度数	割合 (%)	度数	割合 (%)
学生とのコミュニケーション	117	46.4%	22	8.7%
授業の組立	54	21.4%	23	9.1%
テキスト・資料等の教材	66	26.2%	24	9.5%
制作映像や実演等	162	64.3%	8	3.2%
話し方・声の大きさ	15	6.0%	153	60.8%

表6 学年と最もわかりやすい視聴覚教材のクロス集計

項目		すべてわかりやすい	制作映像	実演	PPT	すべてわかりにくい	合計
1年生	度数	48	44	28	7	2	129
	学年 の %	37.2%	34.1%	21.7%	5.4%	1.6%	100.0%
	わかりやすい教材の %	44.0%	66.7%	43.8%	100.0%	66.7%	51.8%
2年生	度数	61	22	36	0	1	120
	学年 の %	50.8%	18.3%	30.0%	0.0%	.8%	100.0%
	わかりやすい教材の %	56.0%	33.3%	56.3%	0.0%	33.3%	48.2%
合計	度数	109	66	64	7	3	249
	学年 の %	43.8%	26.5%	25.7%	2.8%	1.2%	100.0%
	わかりやすい教材の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表7 視聴覚教材の理解度及び効果

項目	度数	平均値 <sup>注1</sup>	標準偏差
制作映像を通して制作過程を理解することができた	251	4.03	0.73
制作映像を通して自分の作品づくりができた	251	4.02	0.70
実演を通して制作方法を理解することができた	251	4.16	0.66
実演を通して自分の作品づくりができた	251	4.04	0.69
PPT資料を通して授業の概要等を理解することができた	251	3.84	0.76
PPT資料を通して自分の作品づくりができた	251	3.84	0.73
制作映像、実演、PPTにより、幼児造形への興味・関心が高まった	251	4.17	0.78
授業に対して満足している	250	4.38	0.71

注1：回答選択肢は、「ほとんどそう思わない（1点）」～「非常にそう思う（5点）」の5段階とし、5点満点で得点化した。

#### 4. 考察

##### （1）視聴覚教材の開発および指導方法

造形表現への理解、道具・材料、活動方法および基礎技法の伝達に適した視聴覚教材として「制作映像」「実演」「PPT」を選定し、その教材の適用範囲および期待効果を考慮し上で、各单元のねらいと活動内容に合わせて教材の制作と指導タイプを考案した。このような試みは、既に開発された視聴覚教材を授業の一部に導入するという一般的によく使われている方式とは違い、各单元のねらいと活動内容だけではなく、学生の理解力や幼児造形教育への興味・関心などに合わせて教材の制作や指導方法の工夫が可能であることに大きな意義がある。学生は授業に対して、教員の説明のみではなく、多様な教材を利用した多面的な授業運営を希望しており、視聴覚教材は、授業運営の多面化に貢献するものといえる（辻、2008）。また、多様な方法や工夫をすることによって受講生の学習効果や活動の応用力の向上につながったと考えらえる。また、視聴覚教材を活用した指導タイプの工夫は、学生の理解力の向上はもちろん、授業時間や実技活動などの授業運営にも効果的であると考えられる。特に制作映像の情報量、時間配分については、宇佐美（2003）が「ある情報を学習者が受け取るには時間的な飽和点があって、適当に切り上げないと、残りの情報はむだになってしまう。また、学習者が注意深くいられるのは情報の質にもよるが案外短いものである」と指摘しているように、学生のレベルで吸収できる情報の質と情報

量を配慮したものであり、その効果についてまだ正確に検証できていないが、実際に授業で適用したところ、制作映像に興味を示す学生が多く、理解が足りない部分については、具体的に質問することができるなど、一定の効果がみられたと考えられる。

しかし、本研究の視聴覚教材の開発と指導方法の工夫については、多くの改善課題も見られた。まず、教材の質の向上について、特に制作映像の場合、T 短期大学の造形演習室の設備環境に配慮して制作が行われたため、設備・装備等に多くの限界を抱えており、教材の質を確保するためにもこれらの限界を改善する必要がある。また、教材の適用においても制作映像、実演、PPT の適用範囲と期待効果をより明確にする必要があり、それぞれの教材の期待効果を最大にするための工夫が必要であると考えられる。

## (2) 視聴覚教材の効果および改善課題

本研究で開発された視聴覚教材の効果を探索的に明らかにするために、受講生を対象とするアンケート調査を行った。その結果から、制作映像や実演の効果が高く、制作映像で説明を行うことによって制作過程が理解でき、限られた時間内に効率よく造形活動を行うことができたことから、造形教育において適した指導方法の一つであると考えられる。また、ビデオカメラを用いた実演を通しては、様々な技法を学ぶことや活動方法を理解することができたとみられる。それが学生の作品づくりへの意欲や自信につながったと考えられる。

また、調査対象の受講生が幼児造形を初めて学ぶ 1 年生と 1 年次に引き続き幼児造形授業を受講する 2 年生であるため、学年による視聴覚教材の効果を把握するために、「学年」と「最もわかりやすい教材」の変数とする  $\chi^2$  検定を行った。その結果、「すべてわかりやすい」が 1 年生より 2 年生に有効に多かったことは、1 年生は比較対象がないことに対して、2 年生は視聴覚教材を使っていなかった 1 年次の幼児造形授業と比較ができるため、わかりやすいかどうか判断しやすかったと考えられる。これは、視聴覚教材の適用による効果的一面として捉えることができるといえる。

一方、自由記述から設備環境、道具・材料、指導方法など、視聴覚教材の課題も多く見られた。それらの諸問題点を改善し、よりよい授業づくりをしていくことが課題であると考えられる。

## 5. おわりに

本研究では、保育者養成校における幼児造形教育に適した視聴覚教材の開発と指導方法を工夫し、その効果について明らかにすることを試みた。その結果、制作映像や実演、PPT の教材制作と指導タイプを考案し、実際の授業に適用することで、受講生の学習効果や活動の応用力の向上にある程度の成果がみられた。しかし、探索的に試みた現段階では、開発された教材や指導方法の適合性や効果についてまだ正確に検証できていないという限界と、設備環境、道具・材料、指導方法についての改善課題もみえてきた。

今後、視聴覚教材の活用について、受講生とフィードバックをしながら、改良していくことと、より多くの授業で改良した視聴覚教材の適用と指導方法について検証を重ねていくことが今後の課題であると考えられる。

## 引用文献

- 上田 慎二 (2012) 「視聴覚教材開発と地域連携活動の取り組み：図画工作科教育法における視聴覚教材制作授業の試み」『プール学院大学研究紀要』第 53 号、pp191-202
- 上村 晶 (2012) 「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」『高田短期大学紀要』第 30 号、pp 85-94
- 宇佐美 昇三 (2003) 「教材制作体制を維持することは意義がある(特集)放送教育運動の総括から新たな発展のために」『教育メディア研究』9(2)、pp25-30
- 神谷 洋子 (1992) 「学習意欲を刺激する視覚教材の製作と活用：身近な地域を調べる教材で、探求意欲を高める指導」『日本教育情報学会年会論文集』(8)、pp235-236
- 高橋 敏之 (2001) 「保育者の専門性としての造形理解と幼年造形教育学の構築（特集 保育者の専門性と保育者養成）」『保育学研究』39 (1)、pp20-27
- 辻 義人 (2008) 「視聴覚メディア教材を用いた教育活動の展望」『小樽商科大学人文研究』pp178-187